

TOPICS
2

トピックス…② 需給構造の変化からみた乳用種初妊牛価格の動向

高水準が続いていた乳用種初妊牛の市場取引価格が、本年2月以降は前年以下の水準で推移し、5月、6月の急落により、急上昇を始めた2016年水準に急接近した。市場関係者によると、乳牛資源が回復傾向にあることに加え、大規模経営を中心とする導入需要が一服したためだという。そこで需給構造の変化に着目して、乳用種初妊牛価格の動向を概観する。

市場取引価格の急落

ホクレンの家畜市場情報によると、乳用種初妊牛の平均価格は2015年9月に60万円台となり、16年10月には80万円を突破した。それ以降も上昇傾向を継続して、2018年2月には100万円の大台価格を記録した。

図1は、ホクレン家畜市場における乳用種初妊牛の月平均価格の推移を示している。季節による変動を繰り返しながら、2016年から18年までの間、価格水準は毎年上方シフトしてきたことが分かる。しかし、2019年2月以降は前年を下回って推移し、5月には16年9月以来2年8か月ぶりに80万円を割り込む寸前まで急落した。さらに、6月に入ると各市場が軒並み価格を下げ、月平均価格で73.7万円となり急騰前の2016年水準近くまで急落し、70万円を割り込む市場もみられた。

需給構造の変化

本年になって乳用種初妊牛の市場取引価格が急落した背景には、導入需要の減少があると言われている。それを裏付けるデータとして、「乳用牛群能力検定成績のまとめ」から作成した図2と図3を示した。

図2は北海道、図3は都府県の酪農経営における産次別にみた導入牛（自家生産牛）の占める割合を示している。2017年においては、北海道、都府県ともに、飼養頭数のうち導入牛頭数が占める割合は、産次数の多い経産牛（図中の外側）ほど高くなっているのが分かる。

導入牛が導入された時期は、図中の「初産」牛は2016～17年、「2産」牛は2015～16年、「3産以上」牛は2015年以前がほとんどであろう。したがって、乳用種初妊牛の市場取引価格が2015年末から上昇を続けたことから、2016年以降の導入牛の占める割合が減少し、逆に自家生産牛の割合が増加したことが推察される。繋養されている経産牛に占める自家生産牛比率の増加は、需給構造の変化、つまり導入需要が徐々に減少したことを説明する一つの現象と言えよう。

さらに、図4で乳用種子牛の出生頭数の推移をみてみよう。乳用種子牛の総出生頭数は、長年にわたり減少傾向にあったが、2018年度には増加の兆候がみられる。出生頭数を雌雄別にみると、かつては雄が雌を上回っていたが、2012年度に逆転し、その差は拡大を続けている。雌牛と雄牛の出生比率には、雌雄選別精液の普及とその人工授精技術の向上が大きく影響していると言われている。

雌牛の出生頭数は、2017年度に増加傾向に転じている。出生した乳用種雌牛が初産を迎えるのは育成期間を経た2年後であり、これが「初産」牛の頭数に影響を及ぼすのは2019年度以降となる。つまり、乳用種初妊牛の市場取引価格が急落した背景には、近年の出生頭数の増加による雌牛需給の変化とともに、今後の生乳需給への影響予測が潜在していると言えよう。

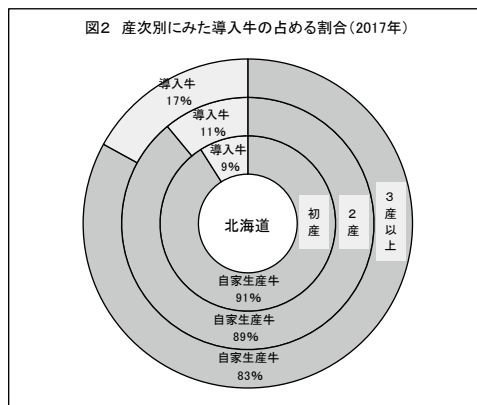


図2 産次別にみた導入牛の占める割合(2017年)
資料：相原光夫「後継牛の自家生産率について」家畜人工授精2019年7月（通巻302号）

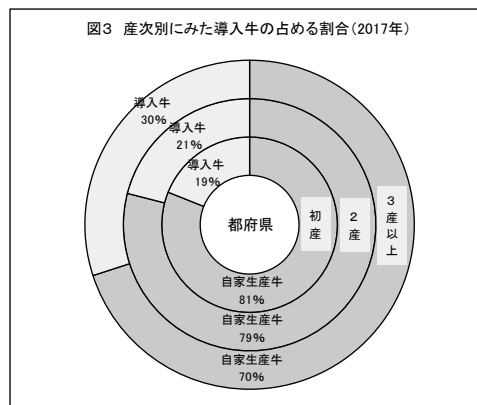


図3 産次別にみた導入牛の占める割合(2017年)
資料：相原光夫「後継牛の自家生産率について」家畜人工授精2019年7月（通巻302号）

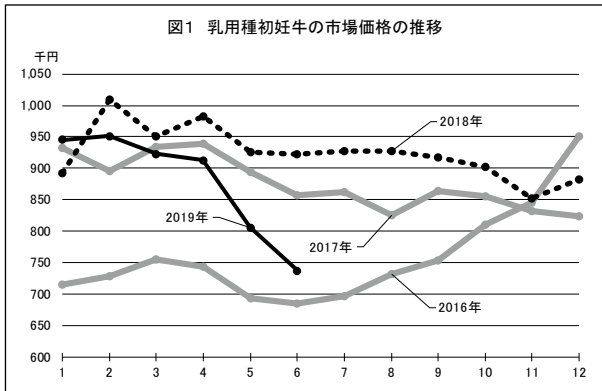


図1 乳用種初妊牛の市場価格の推移
資料：ホクレン「家畜市場情報」
注）価格は月平均で、税込み。

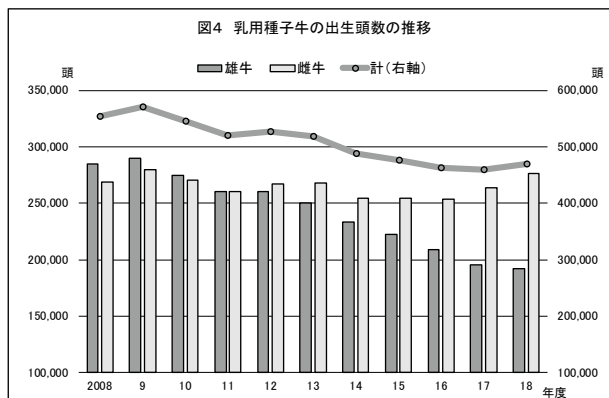


図4 乳用種子牛の出生頭数の推移
資料：独立行政法人 家畜改良センター「牛個体識別全国データベース」
注）2018年度は「乳用牛群全国協議会」による予測値（2019年6月21日現在）。